

(社) 日本東洋医学会

第 61 回 関東甲信越支部学術総会

2004年

プログラム集
要 旨

社団法人 日本東洋医学会
関東甲信越支部会

ランチオンセミナー

『世界に発信する漢方医学』

○渡辺賢治

慶應義塾大学医学部東洋医学講座

明治政府がドイツ医学の導入を決め、西洋医学が唯一のわが国の医療システムで認められて以来、わが国の医学はめざましく発展した。第2次世界大戦後は主に米国の医学がわが国の主流を占めるようになりつつも、国民皆保険という制度を設け、WHOの評価としてもわが国の医療システムは世界の見本となっている。

しかし、その一方でわが国に元来存在してきた漢方医学をあまりに軽視し過ぎてきたきらいがある。しかし、漢方医学は現在の医療を取り巻く環境の中で本当に役立たないものなのであるか？

漢方治療は個に根ざしており、効率が悪い。また、感染症に対して確かに菌そのものを標的とした西洋医学の方に分がある。しかし近年、疾病構造は多様化し、感染症よりも複雑な因子の関与する生活習慣病が主体となってきた。また、がん治療の場などにおいては抗がん剤の作用に個人差のあることが認識され始め、テーラード医療が提唱されている。

漢方医学の個に根ざし、生体防御を主体とした治療は、現代ならびに将来の医学として再び注目を浴び始めている。

欧米ではいち早く生薬製剤に対する関心が高まっており、NIHの部門としてNational Center for Complementary and Alternative Medicine(NCCAM)が1999年に発足したが、年間予算1億2千万ドルで研究支援を行っている。2001年NCCAMはOffice of International Health Researchを立ち上げ、2002年、それまで単一の生薬の生薬製剤はものしか研究対象としていなかった方針を転換し、複合生薬に対しても研究支援をすることとした。こうした動きが国内の漢方に対する再注目の原動力となっていることも確かである。漢方には漢方の物の見方があり、その理論は決して西洋医学と比べ劣るものでなく、単に視点が異なるだけのことである。これらの視点は日本人のみならず世界の人々の役に立つものとする。

現在に至るまで、わが国の医学は欧米の恩恵を受けながら発

展してきたが、今こそ逆に漢方を世界に発信し、より多くの人々の健康の維持に貢献すべき時が来たのではないだろうか。